

第16回日本語大賞

特定非営利活動法人日本語検定委員会



一般の部 優秀賞 受賞作品

『灰色の町』

京都府

辻 裕子

灰色の町

辻 裕子（つじ ゆうこ）

故郷を離れる日、生まれ育った町は相変わらずどんよりとしていた。春の姿も見え隠れする三月下旬だと言うのに、町並みも人も空さえも暗く重く感じたのを覚えている。「もうここで暮らす事はない」そうはつきりと言えるほど、私を育ててくれた町に何の未練も恩義も感じる事なく、あっさり別れを告げて私は憧れの町へと旅立った。

故郷にはかつて、日本最大の炭鉱があった。最盛期には現在の倍以上の人々で溢れ、町は活気に包まれていた。規模的には小さな町に、映画館、デパート、動物園などが次々に建ち並び、日本を支える炭鉱の町の住民として、みんな誇りを持っていた。坑口は数ヶ所あったが、私が生まれた昭和後半には廃坑となっていた場所も多く、故郷にそんな黄金時代があった事は、祖父母や両親の話を聞くまでは知らなかった。私にとつての炭鉱は全くの別物。白黒の記録映像で見た大規模な労働争議や、大勢の死者を出した炭塵爆発事故。用済みになつて朽ちてしまった後も、亡霊のように通学路の脇に居座り続ける炭鉱長屋の群れ。私が中学生の時に炭鉱は完全に閉山したのだが、多くの労働者を地下へと運んだ竪坑櫓を爆破解体するニュース映像は今でもはつきりと覚えている。櫓が無惨に崩れ落ちるのと同時に、故郷が積み上げてきた輝かしい歴史も消え去っていくような気がした。

閉山後の故郷は、瞬く間に衰退していった。人口は激減し、繁栄の象徴だったデパートは全て閉店。繁華街も寂れてシャッターを下ろした店が大半を占めた。

「これからどうなると？」

あまりの廃れ具合に不安を感じ、黄金時代を知る父なら少しは前向きに答えてくれると思って尋ねたが、返ってきた答えは冷ややかなものだった。

「この町はもう終わりばい。」

ふと、労働争議や炭塵爆発事故の映像が脳裏をよぎった。実際目にした訳ではないが、あの時もきつと同じ重い空気が町中に漂っていたに違いない。私の目を通して見る閉山後の故郷は、あの白黒の記録映像のように灰色だった。ここにはもう居られない。明るく鮮やかな世界を求め、私は逃げるように町を飛び出した。

憧れの町に移住して十三年が経った頃、あるニュースを目にした。故郷にいくつか残された炭鉱施設が世界遺産になったというのだ。その中には、子供の時に友達と遊んだ広場を見下ろす明治時代建築の竪坑も含まれていた。赤れんがの建物の横にそびえる鋼鉄の竪坑櫓。当時はすでに廃坑になっていた為、廃墟のイメージしかないその施設が世界遺産だなんて信じられなかった。

喜びに沸く地元の人達の笑顔を見た時、ある違和感を抱いた。炭鉱を失った故郷は活気も魅力も失い、歩みを止めて灰色の町になったはずだった。しかしニュースに映る人々はみな手を取り合つて喜びを分かち合い、故郷を誇りに思い、町全体も大いに盛り上がっていた。その光景は灰色とは真逆の雰囲気だった。祖父母達が話していた黄金時代の人々の一体感や賑わいを、時を超えて垣間見た気がした。炭鉱が閉山した後も、故郷の人々は立ち止まつてなどいなかった。一度は絶望したかもしれないが、それでも積み上げてきた歴史を残そうと必死に活動し、その熱意が世界遺産登録に繋がったのだ。町の未来を思う彼らにとつて、

故郷はいつだって明るく輝いていた。一方私は衰退する町を嫌い、炭鉱を負の遺産だと決めつけ、故郷から勝手に色を剥ぎ取って灰色の町に仕立て上げてしまった。しかしようやく気付いた。灰色だったのは町ではなく、故郷の未来を思い描く事ができなかった私の心だったのだと。

世界遺産登録後、子供の頃に駆け回ったあの広場を久しぶりに訪れてみた。そこはもはやただの空き地ではなく、きちんと整備されて入場料が必要になっていた。何だか不思議な気持ちになりながらも、お金を払い思い出の豎坑と数十年ぶりに再会した。あの時と何ら変わりのない廃墟。違うのは、これからの世代に残す町の記憶に、世界遺産登録という新たなページが追加された事で、炭鉱は重く悲しいだけの存在ではなくなったという事。もう動く事はない。だが、その堂々とした櫓の姿に、この町の歴史の一部としてこれからも生き続けるという揺るぎない決意を感じた。その瞬間、私の前にも美しく彩られた故郷の風景が広がった。

かつて私の心に存在した灰色の町。今は未来に向かう明るい町に姿を変え、一步一步ゆつくりと進んでいる。